



Asian Nurses' Cultural Competence [ANCC]

アジア圏における
看護職の文化的能力の評価と
能力開発・臨床応用に関する国際比較研究

FACT SHEET 2014 SEP.

平成 26 年 9 月 25 日発行 第 1 巻 6 号

千葉大学大学院看護学研究科

附属看護実践研究指導センター

不許複製 禁無断転載 ケア開発研究部 野地有子

Fact Sheet は、CBPR では「わかりやすい言葉で、定期的に、研究活動についての情報をパートナーらと共有する」ために活用します(Israel, 2005,p.298)。本プロジェクトにおいても、Fact Sheet を定期的に発行し、ANCC プロジェクト研究の進捗の概要やデータを共有し、関連するトピックや文献などからの研究成果等も含めます。

Steering Committee Members:野地有子,溝部昌子

Steering Committee Partners:北池正,望月由紀,辻村真由子,池崎澄江,田所良之,鈴木友子,若杉歩
大友英子,西山正恵,池袋昌子,小嶋純,菅田勝也

ワシントン大学ノエル・クリスマン教授の特別講義から学ぶ 多職種・多民族間の協働プログラムの実践方法

報告者：望月 由紀

2014 年 9 月 6 日千葉大学看護学研究科において、ワシントン大学看護学部所属ノエル・クリスマン教授の特別講義が開催された。クリスマン教授は人類学で博士号を取得後、MPH を修めてヘルスケア領域で研究を始められた。米国の看護学部で異文化看護についての授業を最初に創設した第一人者であり、米国病院機能評価(JCAHO)サーベイヤーの評価観察者でもある。

本講義の参加者は、大学院看護システム管理学専攻の現職看護管理者および本研究科の院生・教員、全国の大学病院看護管理者等で、51 名であった。本講義は 2 部構成となっており、前半が理論的枠組みの説明、後半が理論にそった実践報告であった。

1. 現状と理論枠組み

ヘルスケアに関する全世界的な傾向として、a)慢性疾患の増加、b)高齢人口の増加、c)新しい感染症の発生、があげられる。こうした問題に対処し効果的な予防を行うためには、技術的な対応だけでなく、各コミュニティと協同した取り組みが必要となる。ではコミュニティを中心としたヘルスケア予防プログラムを実施していくために何が重要であるか。それはなによりも、各組織が有するそれぞれの文化の違いを理解した上で、パートナーシップを構築することである。クリスマン教授によればパートナーシップは段階的に、1)ネットワーク型(組織間の緩い結びつき)、2)合同委員会型(多様な組織が共通の目的達成のために共同す

る)、3)協働型(より複合的な目的を達成するために堅固に組織化された構造をもつ)に分けられる。

そしてどのタイプにおいても各組織は平等に扱われ、平等に発言権を持つ必要がある。またパートナーシップ関係の中でリーダーシップを発揮するためには、リーダーは全員の意見を聞き、参加者全員が平等になるように努力をし、皆が共有できる一つの目標を明確にすることが肝要である。こうして構築されたパートナーシップを土台にして初めて、当該コミュニティに則したヘルスケア予防プログラムがスムーズに実行可能となるのである。

2. 理論と実践

休憩をはさんで第 2 部は、クリスマン教授が携わる研究が紹介された。

2.1 米国ヤマカ・インディアンの女性の子宮がん検査の促進

本研究は米国のヤマカ・インディアンの女性が子宮がん検査を受けることを促進する目的で始められたもので、参加型アクションリサーチ法が採用された。アクションリサーチ法は「地域住民が地域の意思決定や社会変革に必要となる情報と機会にアクセスできるようにする」ものであり、「研究者と地域住民をつなぎ、研究と参加と政治的アクションを含む共同の試みである」(Flynn et al., 1994)。本研究が成功した理由はヘルスケア専門家だけでなく、地域に発言力のある地域住

報告者：溝部 昌子

民を交えたがん委員会を発足させ、きちんと地域の声を吸い上げた上で、診療所の方針と構造の変化を促したことにある。

2.2 Seattle Partners for Healthy Communities(SPHC)

続いて疾病予防管理センターの助成を受けて 1995～2004 年にかけて行われたプログラム SPHC が紹介された。本プログラムの目的は住民の健康を促進することであり、特定の職種や民族にとらわれずあらゆる人々が自らのニーズを明確にし、優先順位をつけて自らの解決策をコントロールし、さらに自らの進歩を確認できるようになることが重要である。本プログラムもまた、地域に存するあらゆる団体、民族グループに働きかけ、全員の意見を統合して全員で目的を決定したことにより、早い段階からコミュニティに介入しつつ確実な成果を与えることができた。

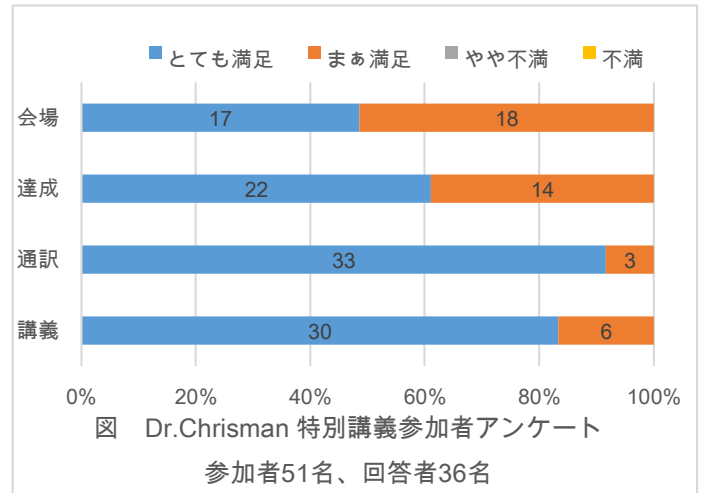
2.3 REACH、島根県立大学看護学部、聖路加大学でのプログラム

続いて Racial and Ethnic Approached to Community Health(REACH)、島根県立大学看護学部、聖路加大学での試みが紹介された。どのプログラムにおいても多職種間・多民族団体の人々の協力を得て、プログラムの目的を明確にし、かつその目的を共有することが重要だった。また人々のネットワークに市長や村長など政治的首長とともに、テレビや新聞などのマスメディアをパートナーとして巻き込むことが、プログラム成功の鍵の一つであった。

3. まとめ

これからの大学や病院は自分の組織内に閉じこもらず、積極的に地域に出ていく必要があること、そして地域において真のパートナーシップに基づいた協同プログラムを成功させる要因は 1) 信頼、2) 尊敬、3) 質の高い組織化能力である、とまとめられた。

当日配布したフィードバックシートは、参加者 51 名に対し 36 名の回答があった。会場、参加目的の達成度、通訳、講義について、1 とても満足、2 まあ満足、3 やや不満、4 不満の 4 段階で尋ねたところ、下図のような結果であった。講義については 83.3%が「とても満足」と回答した。



参加のきっかけについては、地域連携が推進されていながらも、具体的に医療施設と地域がどのようにパートナーシップを築き機能させていくのかについて知りたいという回答が複数あった。医師だけでなく、看護師が外に向かって出ていくことへの関心の高さが伺えた。

それぞれの施設ですでに取り組んでいるアウトリーチには、地域住民向けの公開講座、健康教育、看護技術教育に関するもの、患者会や NPO 法人とのケアカンファレンス、訪問看護ステーションの研修に医療、教育機関が参画するものなどがあつた。

今後取り組みたいそれぞれの課題については、具体的な事業計画の他に、自施設にとっての「地域」をどうとらえるか、地域の健康ニーズのとらえ方、コミュニティや実習施設を通して住民の健康支援に学生や研究者がどのように関わり、協働していくかという意見があつた。

なお、通訳では、92.0%が「とても満足」と回答し、クリスマン先生の優しいながらも力強い語り掛けとそれを損なわない通訳者の言葉選びが効果的であつたと思われた。
以上

News

1. 病院調査プレテストは 15 機関から回答を得ました。調査票の修正・調整後、印刷発送プロセスが進行しています。
2. 千葉県健康福祉部医療整備課主査(看護職)2名が CBPR メンバーとして加わりました。